

こんにちは。
町長です。

うえすぎ ようざん
上杉鷹山から学ぶ



最近、童門冬二氏(小説家)の「上杉鷹山の経営学」を読み返しました。上杉鷹山は今から約250年ほど前の江戸時代の米沢藩(現在山形県米沢市周辺)藩主で、江戸幕府から減封され厳しい構造不況に苦しむ米沢藩を甦らせた

名君と言われた人です。

第35代アメリカ大統領のジョン・F・ケネディー(1917年~1963年)が、日本人記者団との会見で「あなたが最も尊敬する日本人は誰ですか」と質問された時「それはウエスギ ヨウザンです」と答えたとのこと。

鷹山が藩主になる前の米沢藩は幕府のたびたびの減封にあいながら家臣団の整理をしなかったこと、藩の地理的・自然的条件が恵まれなかったこと、度重なる凶作や飢饉に襲われる中で、「入るを計って出づるを制する」の原則を無視して放漫支出をし、藩は疲弊していました。財政援助をしていた商人たちも見放し、農民も土地を捨て逃げ出す者も増え、人口も減少しました。

その様な中、上杉家の養子となり家付き娘と結婚すべく17歳の時に藩主の座につきました。結婚した娘は身体障がい者でした。鷹山は様々な抵抗にあいますが、有能な家臣を登用し、改革を断行します。経営改革の目的は「領民を富ませるため(民富)」を明言し、改革の基底に領民と藩士(家臣)への愛情をもちながら、「徳」を政治の基本に置き、それを「経済」に結びつけました。

経営改革を実行する過程で藩庁役人たちに次のような方法をとったとのこと。

1 改革を妨げる壁が3つあること①制度の壁、②物理

的な壁、③意識(心)の壁

2 改革とはこの3つの壁をこわすことである。中でも特にこわさなければならないのは、③の心の壁であることを強調した。

3 このために実践することは①情報はすべて共有する、②職場での討論を活発にする、③その合意を尊重する、④現場を重視する、⑤城中(藩中)に、愛と信頼の念を回復する。

鷹山の藩士の管理法は「やる気のある者は、自分の胸に火をつけよ。そして身近な職場でその火を他に移せ。」でした。

具体的には、弱い人の福祉施策を重視しましたが、藩財政を考えるといきなりすべてを負担することはできないことから、1.自ら助ける(自助)、2.互いに近隣社会が助ける(互助)、3.藩政府が手を伸ばす(扶助、公助)の三位一体で行いました。また、財政の裏付けとして、地域資源(漆、楮など)を活用した地場産業の振興を図りました。更には、藩校(学校)を創設し人材育成にも努めました。

鷹山は、これらの改革を推し進め、米沢藩を見事に立て直しました。

鷹山の思想は、藩は人民の合意を実行するための機関であり、藩主というのはその国家(藩)と人民のための仕事をするために存在するというもので、当時としては非常に民主的なものでありました。

今、コロナ禍の中で改めて上杉鷹山について学び、町政のかじ取りを進めなければならないと決意を新たにいたしました。

小鹿野町長 森 真太郎